

土曜の午後に Saturday Afternoon

2019年 デジタル カラー 86分 バングラデシュ＝ドイツ

日本語・英語字幕付き

監督：モストファ・サルワル・ファルキ

プロデューサー：モストファ・サルワル・ファルキ

脚本：モストファ・サルワル・ファルキ

撮影：アジズ・ジャンバキエフ

編集：モミン・ビッシャシ

音楽：バベル・アリン

美術：シハブ・ヌルン・ノビ

出演：ジャヒド・ハサン

ポロムプロト・チャテルジー

ヌストラ・イムロズ・ティシャ

イヤド・フラニ

バングラデシュの首都ダッカ。ラマダン期間中の土曜日の午後。あるレストランがイスラム過激派に占拠される。周りを警察に取り囲まれた逃げ場がなくなった彼らは、レストランの客を人質にとる。彼らは外国人の客を別室に隔離し、レストランの従業員を尋問する。コーランを唱えることを強要し、イスラム教徒でない者は容赦なく殺害していく。テレビからは、テロリストによるレストラン占拠のニュースが流れる。そのうち店の人質の中にシーア派のインド人がいることがわかる。テロリストたちは客も含めて誰がインド人か探し始める。誰がインド人か名乗り出なければ全員殺すと脅すのだった。

本作は、2016年7月1日にダッカで実際に起きたテロ事件を元にしたものである。この事件は、7人の過激派がダッカのレストラン「ホーリー・アーティザン」で人質をとり12時間に渡って立てこもった。最後は機動隊が突入り13人の人質を救出したが、日本人7人を含む22人の人質が殺害された。事件についてはISが犯行声明を出したが、バングラデシュ政府はこれを否定して、地元の過激派の犯行としている。監督はこの痛ましい事件をワンシーン・ワンカットの緊迫した映像で描き、過激派の言動に疑問を投げかけながら、希望を見出そうとする。2019年アジアフォーカス・福岡国際映画祭で熊本賞を受賞。

監督メッセージ

この映画は多面的なバングラデシュ社会の、正に中核を揺るがしたテロ事件を描いたものですが、私がこの物語にひかれたのはむしろ、「希望」が私の心を捉えたからです。私たちが、世界中でテロリストやテロ攻撃について見聞きするようになってから随分と時が経ちます。恐らく、世界はそろそろ、穏健派の声を聴くべき時を迎えているのです。イスラム過

激派の前に沈黙する岩のように立ち、彼らを哲学的観点から否定し、過激派の宗教理念に異議を申し立て、自己犠牲と静かな抵抗によって希望の光を放つ声を。そのことが、特に南アジアの、また広く世界の、複雑な社会政治的歴史を扱うこの映画を作るきっかけとなったのです。映画的観点から言えば、2つの挑戦がありました。1つは、人質ドラマにも、純粋な芸術映画にもならない、この映画にふさわしい表現を見つけることでした。当初は人質ドラマのように感じられた事件ですが、すぐにこのようなテロ攻撃には、典型的な人質事件の状況とは違う目的があることが明らかになりました。ほとんどのイスラムテロ事件と同じように、このテロリストたちも、どこにも逃げ道はなく、ただ時間をつぶし、大義名分の宣伝をするだけのゲームへと漕ぎ出したのです。2つめの挑戦は、映画の登場人物たちに呼応して、この映画を脈動させ呼吸させることでした。撮影監督のアジズ・ジャンバキエフ（ベルリン映画祭2013 銀熊賞受賞）とチーム全体の見事な仕事のおかげで、この映画にふさわしい表現と流れを見つけることが出来ました。

（2019年アジアフォーカス・福岡国際映画祭カタログより）

モストファ・サルワル・ファルキ (Mostofa Sarwar Farooki)

監督プロフィール

1973年バングラデシュ生まれ。『Television』（2012）はアジア太平洋映画賞審査員大賞に輝き、第86回米アカデミー賞外国映画部門へのバングラデシュ出品作に選定される。『No Bed of Roses』（2017）は第91回米アカデミー賞外国映画部門へのバングラデシュ出品作に選定される。『土曜の午後に』はバングラデシュで起きたテロ事件を描くことで本国では上映禁止となるが、モスクワ国際映画祭やヴズール国際アジア映画祭で賞に輝いている。

（2019年アジアフォーカス・福岡国際映画祭カタログより）